委託事業実施内容報告書
平成29年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業
【地域日本語教育実践プログラム（A）】

内容報告書

団体名：兵庫日本語ボランティアネットワーク

1．事業の概要

事業名称	地域の日本語教室アクティブラーニングを取り入れた活動を広めるためのプログラム
事業の目的	兵庫日本語ボランティアネットワークでは、平成28年度の同委託事業において、ボランティアの新しい2つの能力を育てるプログラムを行った。プログラムの目的をボランティアの能力を育てることとしたため、養成講座を軸に事業全体を企画した。養成講座には、「問題解決能力」と「クラス形式に対応できる能力」という2つの能力を向上させるための内容を取り入れた。講座の受講者に「問題解決能力」を高めてもらうため、内省を働かせ問題を解決する技術であるクリティカルシンキングを学んでもらい、その実践として、ボランティアとして自分が抱えている悩みや問題を自分で掘り下げて考え、その過程を発表してもらった。また、「クラス形式に対応できる能力」をつけてもらうために、アクティブラーニングについて知ってもらい、実践の場として、同事業で開催した日本語教室での実習を行った。 このような養成講座をした結果、講座の受講者たちから、アクティブラーニングを学んだことにより、普段自分が行っている1対1の支援に対する考えが変わったという意見をもらった。学習者が能動的に学習に参加するよう、教授者がさまざまな活動を授業に取り入れるのがアクティブラーニングなのだが、受講者たちはアクティブラーニングとは何かを学んだことにより、これまでの自分の支援が説明中心であったことに気づいたようだった。これまで当団体が開催してきた養成講座や研修会で地域日本語教室のボランティアたちと話をする機会を持ってきたが、そこでも、説明中心になってしまう、あるいは、気がつけば自分ばかりしゃべっているので学習者のために良くないとは思うのだがどうすれば改善できるか、などの相談が寄せられてきた。その場では、そうなる理由やいくつかの改善方法を提示してきたのだが、ボランティアは今一つ納得しかねるという顔つきでうなずくことが多かった。それが、昨年度の養成講座では、ほとんどの受講者から改善策がわかったという感想が出たのである。 そこで、今回、前年度の取り組みのうち効果が高かった「アクティブラーニングをボランティアに知ってもらう」という部分を取り出し、それを広めることを目的に事業全体を企画することとした。高等教育におけるアクティブラーニング型の授業はクラスを対象とした方法だが、本事業では、地域の日本語教室で中心的な活動形態である1対1の支援での実践が可能な具体的方法を提示する。ボランティアにアクティブラーニングを知ってもらい、それを支援に取り入れてもらうことにより、当団体がこれまで取り組んできた「自律学習ができる学習者を育てる」ということにもつながっていく。 また、学習者の自律を育成するということについては、学習者自身が自分の日本語能力や日本社会でひとりでできることを自覚する必要があるため、カリキュラム案のポートフォリオを活用することによって、現在の自分を知り、今後の計画を立てる助けにしてもらおうと考えている。それと同様に、指導者やコーディネーターにもカリキュラム案の指導力評価を活用してもらい、本事業が終了した時に自分の能力がどの程度変化したかを自覚するツールとすることを考えている。
日本語教育活動に関する地域の実情・課題	日本語教室には、学習者もボランティアも多様な人々が集まっているため、いろいろな問題が発生する。最近の日本語教育の流れでは、学習者のニーズを考慮に入れた教室活動を行うのがいいと言われている。兵庫県下の日本語教室の多くがその考え方を取り入れ、学習者のニーズに沿った活動をしようとしている。そのため、日本語ボランティアたちは、以前以上にさまざまな問題に直面している。それを解決して、よりよい場にするためには、学習者もボランティアも自律的でなければいけない。当団体は、2003年以来、「自律学習ができる学習者を育てる」ことを中心的な考えに置き、それができる自律的なボランティアを育てるための養成講座を開催している。 しかし、養成講座を受講するボランティアが少なく、平成28年度の養成講座も受講者の募集に難儀した。 ボランティアの中には、時間的な制約があり支援をするだけで精一杯で講座などに参加する余裕がないという人や、無償でしていることなのでこれ以上の時間はかけたくない、など養成講座への参加に消極的な人も少なくない。だが、養成講座の受講者たちからの情報によると、今以上に良い支援ができるよう、いろいろなことを学びたいというボランティアが多いという。ボランティアたちは、支援に関することについて学びたいのだが、講座の日程が合わない、開催場所が遠い、内容に興味がない、などの理由で講座に申し込まないことがあるようだ。 地域の日本語教育に関する研究が数多くなされ、支援方法などについても少しずつ進歩している。ボランティアは日本語教育の専門家ではないので、自ら研究成果を知るために文献をあたったりすることは稀だと考えられる。ボランティアが、地域日本語教育の基本的な考え方や新たな支援方法を知るための、最も身近な機会は養成講座だと考えられる。今後は、どのような形で、どのような内容の養成講座を行えば、より多くのボランティアに参加してもらえるかを考えていく必要がある。ボランティアの質が向上すれば、学習者へもより良いサポートができる。
事業内容の概要	当団体では、2003年以降、学習者の自律とボランティアの自律を育てる取り組みを行ってきた。ボランティアに対しては、養成講座で自己主導型学習の方法を提示し、それを日本語教室での支援に取り入れることにより自律的に学習ができる学習者が育てられるということを伝えてきた。しかし、自己主導型学習の方法はやや専門性が強いため、受講者からは、難しいという感想が多かった。 そこで、学習者の自律を育てる他の方法として、平成28年度の養成講座でアクティブラーニングを提示した。そうすると、受講者から、自己主導型学習を取り入れた養成講座の時とは大きく異なる反応が得られた。学習のサイクル全体を知る必要がある自己主導型学習に比べると、単発の活動でもいいアクティブラーニングのほうが理解しやすく、自分の支援にすぐに取り入れられるからであろう。よって、本事業では、このアクティブラーニングをボランティアに知ってもらい、それを支援に取り入れることにより、学習者の自律の促進につなげる取り組みを行う。 まず、平成28年度の同事業で行なった養成講座の受講者たちに、本事業における日本語教室の講師と補助者をしてもらう。養成講座で培ったアクティブラーニングの活動を進める技能を日本語教室に取り入れてもらう。このことは、当団体の役割である会員の育成にもつながる。養成講座を受講するだけで終わるのではなく、それを実践で生かすことにより、ボランティアの育成を行う。受講者たちはみな、それぞれの日本語教室で支援を行っているのだが、講座の講師が引き続きコーディネーターとなり、実践の相談役になることで、講座で学んだことを強化できると考える。 次に、アクティブラーニングを知り、その方法を学ぶ養成講座を実施する。近年養成講座の受講者が減少しているため、これまでとは異なる形式で開催する。これまでは、神戸市内の1つの会場で集中的に30時間の講座を開いていたが、本事業では、より多くのボランティアに受講してもらい、アクティブラーニングを知ってほしいという理由で、講師と補助者が教室に出向いて出前講座を行うことにした。 出前講座は、丹波篠山、淡路島、明石、神戸市内の4か所で行う。開催時間は、各地区共、1回4時間を2回の8時間である。開催日は、それぞれの教室と話し合い、より多くのボランティアが参加できる設定にする。8時間の講座を終えるだけでは実践の振り返りができないので、4か所すべての講座を終えたら、各教室から講座の受講者数人ずつに神戸に来てもらい、実践持ち寄り会を行う。そこで意見交換をすることにより、自分の支援を改善できる。また、そこで他の地域のボランティアと交流することにより、新たなネットワークが構築され、今後の支援に役立つと考えられる。 教材作成は、出前講座のためのものを作成する。アクティブラーニングの定義や、具体的な方法を、専門的な知識がなくても理解できるよう工夫して作成する。
事業の実施期間	平成29年5月～平成30年3月 （11か月間）

2．事業の実施体制

（1）運営委員会

【運営委員】

1	島田　三津起	（公財）兵庫県国際交流協会
2	屋久　和夫	（公財）神戸国際協力交流センター
3	井口　洋	（公財）兵庫県国際交流協会
4	小林　真由美	（公財）神戸国際協力交流センター
5	村上　由記	（公財）兵庫県国際交流協会
6	延原　臣二	東灘日本語教室
7	長尾　正康	兵庫日本語ボランティアネットワーク
8	吉良　健裕	兵庫日本語ボランティアネットワーク
9	高橋　博子	兵庫日本語ボランティアネットワーク
10	尾形　文	兵庫日本語ボランティアネットワーク

【概要】

回数	開講日時	時間数	場所	出席者	議題及び検討内容
1	平成29年6月6日（火） 13:00～15:00	2時間	（公財）神戸国際協力交流センター会議室	屋久和夫、井口洋、小林真由美、村上由記、延原臣二、長尾正康、吉良健裕、高橋博子、尾形文	1. 事業全体の説明 2. 事業内容についての意見交換 3. それぞれが関わる地域日本語教育についての情報交換
2	平成29年11月22日（水） 10:00～12:00	2時間	（公財）神戸国際協力交流センター会議室	島田三津起、屋久和夫、井口洋、小林真由美、村上由記、延原臣二、長尾正康、高橋博子、尾形文	1. 事業の進捗状況について 2. 今後の事業の進め方についての意見交換 3. それぞれが関わる地域日本語教育のついての情報交換
3	平成30年3月19日（月） 10:00～12:00	2時間	（公財）神戸国際協力交流センター会議室	島田三津起、井口洋、小林真由美、村上由記、延原臣二高橋博子、尾形文	1. 全事業の終了に伴う報告 2. それぞれが関わる地域日本語教育のついての情報交換 3. 今後の地域日本語教育について自分たちが何をすればよいのかについて意見交換

（2）事業の実施体制

①運営委員会
兵庫日本語ボランティアネットワークは、本拠地は神戸市内に置いているが、兵庫県内で地域日本語教育に関わる活動をする日本語教室とボランティアのサポートをしている。本事業では、これまで実施できなかった神戸市から遠方の日本語教室での養成講座を実施するため、兵庫県と神戸市の国際交流関係の業務に携わる方々に声を掛けて、運営委員になってもらった。また、神戸市内の地域日本語教室である東灘日本語教室の代表にも運営委員に加わってもらい、現場の声を国際交流協会に届ける役割を担ってもらった。運営委員会では、本事業に関する報告だけではなく、兵庫県下の日本語教育についての情報交換ができた。そして、そこで得た情報をもとに、今後各団体・各自が、どのようなことができるのかについても話し合う機会となった。
②養成講座
兵庫日本語ボランティアネットワークでは、これまでは神戸市内で養成講座を行ってきたが、神戸市から遠方の日本語教室からの需要が増えていることから、今年度は、神戸市内での実施のほか、遠方の3か所でも養成講座を実施した。遠方での養成講座の実施に関する協力団体は、次のとおりである。
1か所目：NPO法人篠山国際理解センター（兵庫県篠山市）、丹波市国際交流協会（兵庫県丹波市）
2か所目：国際交流クラブ高砂（兵庫県高砂市）
3か所目：加小日本語教室（兵庫県加東市）
上の3団体が、各地域の広報や会場の手配をしてくれた。
③日本語教室
これまで当団体が実施してきた日本語教室は、当団体の運営委員が指導者や補助者をしたきたが、本事業での日本語教室は平成28年度の文化庁委託事業の養成講座の受講者たちに指導者や補助者をしてもらった。
④教材作成
神戸松蔭女子学院大学池谷研究室を作成場所とし、准教授、非常勤講師、院生により執筆した
⑤会場
①（公財）神戸国際協力交流センター会議室
②1か所目：1回目・・・NPO法人篠山国際理科センター交流室、2回目・・・柏原住民センター会議室B
2か所目：1回目・2回目・・・コープ高砂育児室
3か所目：1回目・2回目・・・社児童館やしろこどものいえ
4か所目：1回目・2回目・・・（公財）神戸国際協力交流センター会議室

（3）地域における連携体制

① ひょうご日本語ネット（事務局：（公財）兵庫県国際交流協会）の月一度の会合で本事業への協力（広報など）を得た。この会合には、兵庫県国際課、神戸市国際交流推進課、兵庫県教育委員会、神戸市教員会、民間団体、有識者が参加している。
② 本事業の以下の内容について、本団体参加の地域日本語支援グループや日本語支援者などの協力を得た。
養成講座の準備（会場の手配、広報、受講者の受け入れなど）
日本語教室の広報
実践持ち寄り会の広報、参加
③教材作成に関して、近隣の大学である神戸松蔭女子学院大学の教員及び院生の協力を得た。

３．各取組の報告

日本語教育の実施 【活動の名称:「話すって楽しいね！」 】	
目的･目標	本教室は、次の2つの目的を持つ。1つは、自分の会話力に自信がない学習者が今よりも自信を持って日本語で話せるようになるようにサポートする。もう1つは、日本で生活をしていてなんらかの不安があり、知り合いを探している外国人にとっての居場所としての機能を提供する。 本教室を置く地域には、複数の日本語教室が存在する。しかし、未だに学校型の支援方法を続けている教室や、技能実習生への日本語能力検定対策に力を入れている教室が少なくない。そのような教室では、ともすれば学習者の会話を伸ばす活動がおろそかになりがちである。そこで兵庫日本語ボランティアネットワークでは、学習者の会話力を向上するための日本語教室を実施することにした。まず、活動では、いかにして学習者の発話を促すかを意識することにした。そのためには、ボランティアは「説明をしない」活動をするのを共通認識として持つことにした。具体的な方法としてアクティブラーニングを取り入れ、教室のスタッフ全員で、学習者に能動的な学習をしてもらにはどうすればいいかということから考えることにした。 また、日本語学習を終えるとサッサと教室を後にするボランティアが増えてきていることを受け、外国人が気軽に来て、お茶でも飲みながら時間を過ごせる場所を提供しようと考えた。日本語が不自由なく使えれば日本での生活に不自由しないかというと、そんなことはない。心を開いて話ができる人がいなくては、健全な生活はできない。そこで、毎週この曜日のこの時間にあの場所に行くとあの人たちと話ができる、という場所を設置した。
対象	日本語学習をしたい人だけではなく、次のようなさまざまな理由でなんらかの場所を探している外国人。 ①日本語には不自由していないが、日本での生活をさみしいと感じている人 ②日本語の中で生活をしていて疲れたので、母語で話したいと思っている人 ③日本での生活について相談する人を探している人。 ④いっしょにお茶を飲む人が欲しい人など。
取組の内容	本教室は、ボランティアたちにより“知っとう神戸”と名付けられた。 企画段階では、レベ別に2クラス設置し、各クラスで30時間をする予定だったが、学習者が思うように集まらず、1クラスで60時間をすることにした。それにより、1つのクラスにさまざまな日本語レベルの学習者が混在することになった。その対処法としては、全体を1つのクラスとみなすのではなく、1対1の学習もあり、グループ学習もあり、という具合に、その日の参加学習者により、柔軟に対応することにした。 活動内容は学習者の意向に沿ってすることにしたが、日本語能力検定対策のサポートはしないことに決めた。検定対策を希望する学習者が来た時には、会話練習のサポートをする教室であることを伝えることにした。検定のための勉強をしている一人のベトナム人学習者が来た際に、そのことを話すと、すぐに理解してくれて、検定用の勉強は自分でするので、ここではみんなと話すことにすると言った。 毎回の活動内容は、その日に担当したボランティアと学習者で決めた。日本語レベルが高い学習者とは、学習者が主導になるように配慮しながら話題を展開していった。一方、日本語であまり話せない学習者に対しては、市販の教材を使ったり、カリキュラム案からヒントを得たりしながら、少しずつ会話ができるようになる手助けをした。 学習者もボランティアも含めた教室の参加者全員が知り合いになれるよう、全体でおしゃべりをする時間をとったり、毎回、必ずおやつタイムを作り、お茶とお菓子を食べながら、リラックスタイムを設定した。回を重ねていくうち、学習者からの差し入れも見られるようになった。リラックスタイムには、ボランティアたちは意識的に、自分がその日担当していない学習者にも声を掛けるようにした。 その日の教室が終了し学習者が部屋を出る時には、どの学習者にも「～さん、お疲れ様。また来週。」と全員で見送った。学習者たちも、すべてのボランティアの顔を見ながら、「さようなら。また来週。」という様子が見られた。

実施期間	平成29年10月3日～平成30年2月20日	曜日・時間帯	火曜日（12:30～15:30）
開催回数	全60時間 （1回3時間 ×20回）	開催場所	（公財）神戸国際協力交流センター会議室
参加者	総数33人 （日本語学習者26人、 指導者・支援者7人など）	使用した教材・リソース	既存の教材はほとんど使用せず、その都度読み物や身近にあるものを持参した。（絵本、観光案内のチラシ、地図、歌詞、百人一首、かるたなど）

出身・国別内訳（人数）	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン
	15（内、台湾4人、香港1人、マカオ1人）	1	0	1	0	0	0	0	1
	アメリカ（2人）、イギリス（1人）、スペイン（1人）、チュニジア（1人）、ニュージーランド（1人）、南アフリカ（1人）、ルワンダ（1人）								

カリキュラム案活用	活用部分 「目的地への生き方を尋ねる」・・・事前に学習者に行きたい場所を尋ね、次回までに支援者がその場所への生き方を調査しておき、その内容を活動の中で学習者と共有した。 「私的な場面で自己紹介をする」・・・ゼロ初級の学習者に対して、教室のみんなに個別に自己紹介をするために、簡単な挨拶の仕方を提示した。そして、教室の一人一人に自己紹介をして回った。

日本語教育の実施内容

回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	取組のテーマ	授業概要	指導者名	補助者名
1	平成29年10月3日（火） 12:30～15:30	3	（公財）神戸国際協力交流センター会議室	4	グループ別	【前半】 宇野・岡田：母国の地理、宗教について 小川・山本：新聞記事（中国人留学生が投稿した、「日本人のあいまい文化について」を使って。曖昧な表現について学習者からの質問があり、それについて話す。（ちょっと～、でも～） 【後半】 全員で、おしゃべりタイム テーマ：食べ物（好きな食べ物や食品アレルギーについて）	宇野祐子 小川未佐子	岡田弘 山本佳代子
2	平成29年10月10日（火） 12:30～15:30	3	（公財）神戸国際協力交流センター会議室	6	グループ別	10月31日にお茶会をすることになり、それを学習者に伝えたついでに、各グループで話が盛り上がった。 【前半】 岡田・小川：お茶会について。そこから好きな食べ物について。 井畑・山本お茶会について。料理について。 【後半】 全員で、おしゃべりタイム テーマ：31日のお茶会について。休日の過ごし方。	岡田弘 井畑眞理子	小川未佐子 山本佳代子

3	平成29年10月17日（火） 12:30～15:30	3	（公財）神戸国際協力交流センター会議室	5	グループ別	【前半】 井畑：学習者が持参した「ムジナ」（小泉八雲）を学習者とボランティアで読み進めた。 宇野：七五三と季節をテーマにおしゃべり 小川・山本：行きたい場所・そこへの行き方（カリキュラム案参考） 【後半】 全員で、おしゃべりタイム テーマ：方言（日本のいろいろな場所のホテルでコックをしてきた中国人学習者を中心に自分が聞いたことがある方言について話した。	小川未佐子 宇野祐子	井畑眞理子 山本佳代子
4	平成29年10月24日（火） 12:30～15:30	3	（公財）神戸国際協力交流センター会議室	6	グループ別	【前半】 井畑：前回に続き、学習者が持参した「ムジナ」（小泉八雲）を学習者とボランティアで読み進めた。 宇野：『にほんごチャレンジN4』を使って、語彙を増やす練習。 岡田・山本：新聞記事「君はうそつきだから小説家に」（浅田次郎）と小説『鉄道員（ぽっぽ屋）』と高倉健について。 【後半】 全員で、おしゃべりタイム テーマ：来週のお茶会について。一年間予定で来日している留学生から住んでいるところの話が出て、それに関して家財道具などについて話した。	井畑眞理子 岡田弘	宇野祐子 山本佳代子
5	平成29年10月31日（火） 12:30～15:30	3	（公財）神戸国際協力交流センター会議室	10	お茶会	お茶の先生を招いてのお茶会。お茶や和菓と干菓子についてお茶の先生から講義を受けた後、全員でお点前をいただいた。その後、1人ずつお茶を点てた。学習者全員がお茶を点てるのは初めてということで、緊張しながらも楽しそうに点てていた。	宇野祐子 小川未佐子	岡田弘 山本佳代子
6	平成29年11月7日（火） 12:30～15:30	3	（公財）神戸国際協力交流センター会議室	4	自己紹介	【前半】 井畑・山本：信号機の緑はなぜ「青というのか」に始まり、日本と母国の信号機の違いなどについて話した。そこから話題は交通ルールに発展した。 岡田・小川：童謡「七つの子」を練習した。その後、季節柄、七五三について話した。 【後半】 全員で、おしゃべりタイム テーマ：各グループで話した話題から、信号機と童謡について。	岡田弘 井畑眞理子	小川未佐子 山本佳代子
7	平成29年11月14日（火） 12:30～15:30	3	（公財）神戸国際協力交流センター会議室	4	グループ別	【前半】 井畑・岡田：ハンカチについて。日本人はハンカチを持っている人が多いことに気づいた学習者からの話題。 宇野・山本：日本人配偶者を持つ女性から、日本人の生活や文化について知りたいという要望があり、ボランティアたちが、自分たちの生活のエピソードなどについて話したり、学習者が気づいた日本人の生活について話したりした。 【後半】 全員で、おしゃべりタイム テーマ：日本の好きな場所（旅行体験などから）	宇野祐子 小川未佐子	井畑眞理子 山本佳代子
8	平成29年11月21日（火） 12:30～15:30	3	（公財）神戸国際協力交流センター会議室	4	グループ別	【前半】 井畑・山本：新聞記事を読む。新出語「撮り鉄」「秋の日はつるべ落とし」を学習者がすぐに理解したのをみた新米ボランティアが感動したそうだ。 宇野・岡田：学習者に日本語学習への道、について聞く。その後、暖房、干支と展開。 【後半】 全員で、おしゃべりタイム テーマ：それぞれの家の暖房につい	井畑眞理子 岡田弘	宇野祐子 山本佳代子
9	平成29年11月28日（火） 12:30～15:30	3	（公財）神戸国際協力交流センター会議室	4	自己紹介	【前半】 小川・山本：童謡「旅愁」から、形容詞の学習。 宇野・岡田：学習者の日本語への道についての話を聞く。 【後半】 全員で、おしゃべりタイム テーマ：子供のお稽古事について。	宇野祐子 小川未佐子	岡田弘 山本佳代子
10	平成29年12月5日（火） 12:30～15:30	3	（公財）神戸国際協力交流センター会議室	4	グループ別	【前半】 小川・山本：幼稚園児を持つ学習者を中心に、お稽古事、お弁当について話す。 井畑・岡田：「おっちょこちょい」。学習者が話した失敗のエピソードから、「おっちょこちょい」という日本語があることを提示。その後、自分の「おっちょこちょい」談を出し合った。 【後半】 全員で、おしゃべりタイム テーマ：子供のお稽古事について。	岡田弘 井畑眞理子	小川未佐子 山本佳代子

11	平成29年12月12日（火） 12:30～15:30	3	（公財）神戸国際協力交流センター会議室	4	グループ別	【前半】 小川・山本：学習者が職場で嫌な思いをさせられる日本人がいるということを言い出し、それについてボランティアたちと意見を交換した。 井畑・宇野：幼稚園の連絡ノートについて。 【後半】 全員で、おしゃべりタイム テーマ：日本の職場、母国の職場。	宇野祐子 小川未佐子	井畑眞理子 山本佳代子
12	平成29年12月19日（火） 12:30～15:30	3	（公財）神戸国際協力交流センター会議室	6	カラオケ	来日してからカラオケに行ったことがないので行きたいという学習者の希望で、全員でカラオケに行った。学習者には、日本語教室の一環であることを伝え、前半は日本語の歌を披露してもらったり、全員で、教室で学んだ「旅愁」を歌った。後半は、母語での歌や、その場で日本の歌を教え合ったりした。	井畑眞理子 岡田弘	宇野祐子 山本佳代子
13	平成29年12月26日（火） 12:30～15:30	3	（公財）神戸国際協力交流センター会議室	4	日本のお正月	・全員で百人一首とかるたをした。 ・学習者による「たぬきの糸車」の朗読。	宇野祐子 小川未佐子	岡田弘 山本佳代子
14	平成30年1月9日（火） 12:30～15:30	3	（公財）神戸国際協力交流センター会議室	5	グループ別	【前半】 小川・井畑：『スイミー』をもとに話を進めた。 山本：『言葉の知恵袋』という本を参考に、中級学習者の語彙を増やす学習を行った。その後、論文執筆についての話を聞いた。 岡田：新入室のゼロ初級学習者（イタリアから来たチュニジア人）の対応。英語を媒介語として、何を学びたいかを聞き取り。まずは、自己紹介からといことになった。 【後半】 全員で、おしゃべりタイム テーマ：自分の国について	岡田弘 井畑眞理子	小川未佐子 山本佳代子
15	平成30年1月16日（火） 12:30～15:30	3	（公財）神戸国際協力交流センター会議室	9	グループ別	この日は、後半のおしゃべりタイムはなし。各グループごとに休憩を取りながら学習した。学習者が多かったので、4つのグループに分かれた。 小川：初級前半の学習者も含め、6人の中国人学習者と活動。日本語があまりわからない学習者には、先輩学習者が通訳をするなどして、みんなでワイワイと活動した。日本語がわからなくても、中国語で発言できる環境だったため、全員が会話に参加できた。会話の中で、「シフト」という言葉が出た時、日本でアルバイトをしている学習者が初めてその言葉を知り、感激していた 井畑：お姉さんが日本で経営しているラーメン店の支店を任されている学習者と、家族や趣味について話す。 山本：先週から来ているゼロ初級の学習者とICOCAやピタパなどのプリペイドカードや買い物に関する言葉を練習した。コンビニのローソンは知っているが、デパートのそうごうやスーパーのダイエーは知らなかった。 宇野：『にほんご45じかん　れんしゅうちょう』と使い、「どうしましたか」と「～はどうでしたか」を練習した。	宇野祐子 小川未佐子	井畑眞理子 山本佳代子
16	平成30年1月23日（火） 12:30～15:30	3	（公財）神戸国際協力交流センター会議室	5		宇野・山本：週末何をしたかを話した。ご主人とのサイクリングや、友達と大阪で会ったことなどが出た。そこから、国での休日の楽しみ方を聞いた。 岡田・井畑：神戸市マップを使い、どこに住んでいるかをお値に確認したあと、教室にいる人たちに、どこに住んでいるのかを聞く活動をした。学習者が一人一人に神戸市マップを見せ、「どこに住んでいますか」と聞いて回った。その活動により、教室全体が、誰がどこに住んでいるかを共有でき、少しの間全体でおしゃべりをすることになった。	岡田弘 井畑眞理子	宇野祐子 山本佳代子
17	平成30年1月30日（火） 12:30～15:30	3	（公財）神戸国際協力交流センター会議室	6	グループ別	宇野・岡田：「乗ります・降ります」「入ります・出ます」を使った文の練習。 小川・山本：学習者からの希望で、「関西弁」をした。「ちゃうちゃう」や「そやで」などが出ると、「聞いたことがある」という声が出た。標準語と対応させた会話文を提示し、ネイティブの関西弁話者の指導の下、ボランティアたちも関西弁の発音練習をした。	宇野祐子 小川未佐子	岡田弘 山本佳代子
18	平成30年2月6日（火） 12:30～15:30	3	（公財）神戸国際協力交流センター会議室	5	グループ別	岡田・山本：関西人の行動について。日本人でも地域により文化が異なり、関西人も特徴があることを話題にした。買ったものを「見て見て」と見せびらかすなどを例に挙げた。 井畑・小川：「スーホーの白い馬」を読解した。	岡田弘 井畑眞理子	小川未佐子 山本佳代子

19	平成30年2月13日（火） 12:30～15:30	3	（公財）神戸国際協力交流センター会議室	5	グループ別	宇野・山本：ゼロ初級の学習者への文字練習のサポート。自己紹介の練習 小川・井畑：話題は、「ふるさと」の歌詞から、故郷を思う気持ちだけではなく、立身出世も込められているという内容から、中国の田舎で勉強をし、大学の教員になった学習者の話へと展開した。	宇野祐子 小川未佐子	井畑眞理子 山本佳代子
20	平成30年2月20日（火） 12:30～15:30	3	（公財）神戸国際協力交流センター会議室	5	グループ別	岡田・宇野：4月から大阪で働くことになった日本語学校の留学生と、いろいろな仕事や会社について話す。 井畑・山本：自己紹介の練習。ゼロ初級の学習者同士で、自己紹介や簡単な会話のやり取りを練習した。	岡田弘 井畑眞理子	宇野祐子 山本佳代子

（1）特徴的な活動風景（2～3回分）

〇取組事例①

【第9回　H29年11月26日】
本教室では、学習する際、ボランティアと学習者ボランティアのペアやグループを固定していない。元小学校の音楽教師の小沢さん（仮名）は、歌が好きな中国人学習者王さん（仮名）と学習するときには、必ず日本の歌の歌詞を用意してくる。この日小沢さんは、童謡「旅愁」の歌詞を用意してきた。小沢さんが歌ってみせると、王さんは中国でも聞いたことがあると言った。小沢さんは日本語の歌詞の意味を説明し、王さんともう一人のボランティア伊達さん（仮名）とともに「旅愁」を練習した。その後、歌詞を見ながらではあるが、教室のみんなの前で、「旅愁」を披露した。（写真、左が王さん、右が小沢さん）

〇取組事例②

【第13回29年12月26日】
この日は、カルタ取りをした。カルタは百人一首を使った。ボランティアのひとりがインターネットで読み方を検索し、読み上げた（写真左）。百人一首はボランティアたちにも簡単に取れることはなく、学習者と一緒に札を探した（写真中央）。次に、坊主めくりをした（写真右）。最初のカルタ取りとは違って、坊主めくりは学習者もボランティアも大いに楽しめた様子だった。日本語を聞く必要も、また字を探す必要もないこともあり、日本語のレベルに関係ないこともあり、学習者からは大きな笑い声が絶えなかった。

〇取組事例③

【第1回29年10月3日、第2回10月10日、第3回10月17日、第4回10月24日、第6回11月7日、第7回11月14日、第8回11月21日、第9回11月28日、第10回12月5日、第11回12月12日、第14回30年1月8日】
本教室では、教室に参加する人どうしが顔見知りになることを目的の1つに掲げている。それを達成するために、ボランティアたちは、どの学習者に対しても、「こんにちは」「お疲れ様」や「また来週」などのあいさつをしたり、休憩時間に一人でいる学習者には、話し掛けたりした。このようなボランティアから学習者に声を掛けるのは簡単にでき、それによって親しくなれるのだが、学習者同士が親しくなるためには、ボランティアからの仕掛けが必要になる。そこで、毎回の活動で、個別活動のあと、全体で活動する時間をとることにした。この全体での活動は、全20回のうち、上に記した11回で行った。下の写真は、第3回10月17日の活動風景である。この日は、アメリカ人1名、中国人4名（1名の香港の学習者を含む）の5名の学習者と4名のボランティアとコーディネーターが参加し、みんなでおしゃべりをした。学習者の楊さん（仮名・香港出身）が、日本の各地のホテルでコックをしてきた経験から、いろいろな地方の方言について話し、そこから話が広がり、自分の国の方言や、関西弁でわかりにくい言葉などについて、みんなで話した。

（2）　目標の達成状況・成果

本教室は、①学習者が自信を持って日本語で話せるようになる、②学習者が本教室を居場所と思えるようになることにより日本での生活での不安を取り除く、という2つの目標を目指して進めていった。
①については、まず、教室にいる学習者に対して、学習時間だけではなく休憩時間も含めて、どのボランティアも積極的な関りを持つことに努めた。また、学習時間での発言が少ない学習者に対しては、学習者が日本語を発することに慣れるための発音練習をし、日本語を口にすることに自信がもてるようにした。それらを続けることにより、最初は口数が少なかった学習者が自分からボランティアに話す姿が見られるようになった。アンケートに協力した10人の学習者のうち、7人が「（日本語が）上手になったと思う」と答え、3人が「（日本語が）まあまあ上手になったと思う」と答えたことからも、効果があったことがわかる。
②については、「居場所としての日本語教室」というフレーズが頻繁に使われているのだが、日本語教室が本当にその役割を果たせるのかという疑念が、ボランティアやコーディネーターも含めたスタッフ全員にあった。しかし、中国から日本文化を学ぶために来日した中国人学習者が帰国する際に残したことばにより、スタッフの迷いは晴れた。李さん（仮名）は、1年間の予定で来日した。日本の大学に研究者として席を置いてはいたが、日本での生活は孤独だった。「初めの半年、寂しくて毎日泣いていました。」と言った。来日から半年経ったころ、“知っとう神戸”の存在を知り訪れた。「“知っとう神戸”に来てから、私は“知っとう神戸”の先生たちと話ができました。日本人の知り合いができました。それから、日本での生活が楽しくなりました。今では日本が大好きです。」と涙を流しながら言った。それを聞いていたスタッフたちも、うれし涙を流した。
上のことから、2つの目標は達成できたと言える。“知っとう神戸”に関わったスタッフたちは、学習者が日本で安定した生活を送るためには、日本語能力だけではなく、頼れる人を作ることも重要だということを今回の教室から学ぶことができた。

（3）　今後の改善点について

本教室は、日常的に開催している教室ではなく、委託事業や助成金事業として、単発に開催している。そのため、まずは、学習者集めに苦労をした。ボランティアは学習者を集めるべく、市の複数の掲示板に貼ったり、学習者が立ち寄りそうな場所に置かせてもらったりした。が、どれもさほど効果がなかった。教室が進むうちに学習者数は増加したが、それは、芋づる式に、学習者にきた人が知り合いに声を掛けて広まることが多かった。今後は、主催団体がSNSを使ったりHPを刷新したりする必要があることも学習者からの話により気づいた。
次に、学習者が少ないことを見越して、申し込み期限を設けなかったため、第10回を過ぎたあたりに申し込んだ学習者もおり、ボランティアが学習者に慣れるのに苦労をしていたが目についた。これについては、学習者が少ないと想定されるときでも、申し込み期限を設けるのが良いと考える。それは、ボランティアのためだけではなく、学習者にとっても日本語学習の時間をある程度以上確保できるという点で、良いであろう。

日本語教育を行う人材の養成・研修の実施 【活動の名称：：アクティブラーニングを取り入れよう！】

目的・目標	受講者がアクティブラーニングとは何かを知り、実際の支援にアクティブラーニングを取り入れることができるようになることを目指す。 ボランティアたちから、学習者に話す機会を与えなければいけないということはわかっていても、具体的にどうすればいいかわからないので、結局説明中心の支援をしてしまうということを聞くことがある。ボランティアたちに、日本語支援で学習者に発話の機会を与えるという基本的なことができるようになってもらうことで、学習者にとってよりよい学習の機会を提供できると考えられる。 全8時間の講座を4時間ずつに分け、2回実施する。1回目と2回目を3週間から4週間開ける。1回目には、アクティブラーニングとは何かを学び、次に具体的にどのような活動方法があるかを考る。そして、アクティブラーニングを取り入れた活動をするための教材の作成方法を学ぶ。2回目までに自分で教材を作成し、実際に教室で使ったてみる。2回目には、アクティブラーニングの復習をし、自作の教材とそれを使った活動報告を行う。そして、4か所すべての出前講座が終了したら、4教室の受講者が中心となり、今回の養成講座で作成した教材とそれを使った実践や、日頃の活動での問題などを発表し合う、実践持ち寄り会を行う。
対象	1日でも良いので、日本語学習支援の経験がある人。
取組の内容	養成講座は兵庫県の4か所で行い、4か所とも同じ内容で実施した。講座は、本事業で作成した教材である『アクティブラーニング型活動への招待―自分で教材を作ってみませんか―』により進めた。すべての講座を終えた後、実践持ち寄り会を神戸市で開催した。 【養成講座開催地域】 ①丹波篠山地区 1回目：10月29日（日）13：00～17：15（15分の休憩を含む）、NPO法人篠山国際理科センター交流室 2回目：11月12日（日）10：00～15：00（1時間の休憩を含む）、柏原住民センター会議室B ②神戸地区 1回目：11月29日（水）13：00～17：15（15分の休憩を含む）、（公財）神戸国際協力交流センター会議室 2回目：12月20日（水）13：00～17：15（15分の休憩を含む）、（公財）神戸国際協力交流センター会議室 ③高砂地区 1回目：11月26日（日）10：30～15：30（1時間の休憩を含む）、コープ高砂育児室 2回目：12月17日（日）10：00～15：00（1時間の休憩を含む）、コープ高砂育児室 ③加東地区 1回目：1月27日（土）12：35～16：45（15分の休憩を含む）、社児童館やしろこどものいえ 2回目：2月20日（火）12：35～16：45（15分の休憩を含む）、社児童館やしろこどものいえ 【講座の内容】 1回目（4時間） ・アクティブラーニングってなに ・アクティブラーニングと教師主導型活動の違い ・アクティブラーニング型活動をやってみよう。 ・アクティブラーニングを取り入れた教材の作り方 2回目（4時間） ・アクティブラーニングの復習 ・自作の教材発表 【実践持ち寄り会】 3月7日（水）12：30～16：30、（公財）神戸国際協力交流センター会議室 ◎発表者と発表タイトル] 名前　／　タイトル　／　所属 今竹　純子／『地震だ！どうする！』作った教材どう使う？／ 国際交流クラブ高砂 大沼　和世／ 漢字を教えています／神戸コミュニティーセンター 岡田　弘／「知っとう神戸」にこんな人が来はりました／ 知っとう神戸（本事業開催教室） 小川　未佐子／ 神戸を知ろう／ 知っとう神戸（本事業開催教室） 小西　利隆 ／道順をたずねる ／加小日本語教室 高原　加代子／ 食から始める日本語／ 国際交流クラブ高砂 十倉　直子／ ❝丹（まごころ）の里奮闘記❞／丹波市国際交流協会春日日本語教室 松本　邦夫 ／あなたはどこへいきますか？／ 加東市国際交流協会日本語教室 ◎参加人数 出席者41名（発表者8名、参加者33名）

実施期間	平成29年10月29　日～平成30年2月20日	曜日・時間帯	開催地域により異なる。詳細は、「取り組み内容」および、「養成・研修の実施内容」に記載。
開催回数	全32時間　（　1回4時間　×2回×4か所）	開催場所	開催地域により異なる。詳細は、「取り組み内容」および、「養成・研修の実施内容」に記載。
参加者	総数62人 （日本語支援者60人、　指導者・支援者2人など）	使用した教材・リソース	本事業で作成した教材 『アクティブラーニング型活動への招待―自分で教材を作ってみませんか―』

出身・国別内訳（人数）	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン
	日本人62人								

カリキュラム案活用	養成講座でカリキュラム案を活動しなかったが、養成講座で使用する教材を作成する際に、カリキュラム案から内容を取り入れた。

養成・研修の実施内容								
回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	研修のテーマ	授業概要	講師名	補助者名
1	平成29年10月29日（日）13:00～17:15（15分の休憩を含む）丹波篠山地区1回目	4	NPO法人篠山国際理科センター交流室	8	アクティブラーニング型活動とは	・アクティブラーニングってなに ・アクティブラーニングと教師主導型活動の違い ・アクティブラーニング型活動をやってみよう。 ・アクティブラーニングを取り入れた教材の作り方	尾形　文	泉　祐花
2	平成29年11月12日（日）10:00～15:00（1時間の休憩を含む）丹波篠山地区2回目	4	柏原住民センター会議室B	12	自主教材とそれを使った実践発表	・アクティブラーニングの復習 ・自作の教材発表	尾形　文	泉　祐花
3	平成29年11月26日（日）10:30～15:30（1時間の休憩を含む）高砂地区1回目	4	コープ高砂育児室	4	アクティブラーニング型活動とは	・アクティブラーニングってなに ・アクティブラーニングと教師主導型活動の違い ・アクティブラーニング型活動をやってみよう。 ・アクティブラーニングを取り入れた教材の作り方	尾形　文	泉　祐花
4	平成29年11月29日（水）13:00～17:15（15分の休憩を含む）神戸地区1回目	4	（公財）神戸国際協力交流センター会議室	16	アクティブラーニング型活動とは	・アクティブラーニングってなに ・アクティブラーニングと教師主導型活動の違い ・アクティブラーニング型活動をやってみよう。 ・アクティブラーニングを取り入れた教材の作り方	尾形　文	泉　祐花
5	平成29年12月20日（水）13:00～17:15（15分の休憩を含む）神戸地区2回目	4	（公財）神戸国際協力交流センター会議室	12	自主教材とそれを使った実践発表	・アクティブラーニングの復習 ・自作の教材発表	尾形　文	泉　祐花
6	平成29年12月17日（日）10:00～15:00（1時間の休憩を含む）高砂地区2回目	4	コープ高砂育児室	2	自主教材とそれを使った実践発表	・アクティブラーニングの復習 ・自作の教材発表	尾形　文	泉　祐花
7	平成30年1月27日（土）12:35～16:45（15分の休憩を含む）	4	社児童館やしろこどものいえ	15	アクティブラーニング型活動とは	・アクティブラーニングってなに ・アクティブラーニングと教師主導型活動の違い ・アクティブラーニング型活動をやってみよう。 ・アクティブラーニングを取り入れた教材の作り方	尾形　文	泉　祐花
8	平成30年2月20日（火）12:35～16:45（15分の休憩を含む）	4	社児童館やしろこどものいえ	15	自主教材とそれを使った実践発表	・アクティブラーニングの復習 ・自作の教材発表	尾形　文	泉　祐花

（1）特徴的な活動風景（2～3回分）

〇取組事例①

【写真左：H29年11月26日高砂地区第1回、写真右：H30年2月20日加東地区2回目】
写真右は高砂地区での1回目の講座の様子である。高砂地区では、1つの日本語教室を対象とした講座を実施した。その教室はボランティアが6人ほどで、学習者もあまり多くないという。こちらから出前講座を実施てさてほしいという依頼をしたとき、受講者が少なくても良いかという質問を受けた。当事業のコーディネーターは、規模が小さくて自分たちで養成講座を開けない教室にこそ出前講座が必要だろうと考えていたため、その旨説明をし、開催することとなった。当日の受講者が4人だったため、講座の内容に関連した自分たちの教室の問題点などを講師に話し、解決策を受講者たちで話し合う場面もあり、他の3か所の講座とは異なる運びとなった。2回目の講座までの宿題に対しても、面白そうだという言葉を発した。実際、受講者たちは、2回目の講座には、丁寧に作成した教材を持参した。そして、自分で作成した教材を使った日本語学習の様子を発表した。
写真右は、加東地区での2回目の講座の様子である。今回の出前講座で受講者たちは、1回目で得た知識をもとに自分で教材を作成し、2回目に教材作成や実践などを発表した。写真右は、2回目の講座で自作の教材を発表している様子である。宿題があると聞いた受講者たちは一様に、「え～」と声を挙げる。そして講師が「宿題ができなかったから休むということがないように！宿題ができなくても次回も来てくださいね。」と言うと笑顔になる。宿題を嫌がっていた受講者たちは、ほとんどの人が自作の教材を持参し、他の受講者に説明をしていた。受講者たちは聞く側になっても熱心に質問をし、自分の支援のヒントにしようとしていることがわかった。

〇取組事例②

【実践持ち寄り会H30年3月7日】
各出前講座の受講者による実践持ち寄り会を神戸市で開催した。発表者は8人で、各地区での出前講座の2回目にお披露目した教材を使った実践のポスター発表を行った。当団体でボランティアによる実践持ち寄り会を開催するのは初めてということもあり、参加者が集まるかどうか不安だったが、当日は33名の参加があった。参加者たちには、これまで当団体が開催してきた養成講座では得られない、ボランティア間で意見交換をする時間を十分に味わってほしいということを告げた。参加者たちが書いたアンケートには、「学習者に「楽しんで勉強してもらう」ことに腐心しておられる方、「日本語って面白い」と言ってもらえるように工夫しておられる方・・・。とても刺激を受けました。今日の経験を今後のアクティブラーニングに活かしていきたいと思います。」や、「なかなか他の教室の方の実践を知る機会はありませんので、今回のような会は本当に貴重な機会だと思いました。本当にお疲れさまでした！！！」などのような肯定的な意見が多く書かれていた。また、発表者からは、「 講座の受講で“アクティブラーニング”の重要性を知り、課題の教材を作成し、アクティブラーニングを実践しようと試みましたが、なかなかむずかしくて反省することばかりでした。余り他の発表者のお話は聞けなかったのですが、“マンツーマン”でのアクティブラーニングはしにくいと共通意見が聞けて少しホッとしました。今日は色んな方々とお話し出来て良かったです。」という意見があった。
ボランティアのブラッシュアップのために、これまでは養成講座をたびたび行ってきた。しかし、ボランティアの実践持ち寄り会は行ったことがなかった。講師からの知識を得る要素が多い講座だけではなく、他のボランティアの実践からいろいろなことを学んでほしいと兼ねてから考えていたのだが、それを今回初めて開催することができた。第1回ということで、発表者を集めるのに苦労をした。出前講座で声を掛けても、発表用のポスターを作成するのが大変だという理由で断られることが多かった。参加者からは肯定的な意見が多かったので、今後も今回のような実践持ち寄り会を継続していきたい。

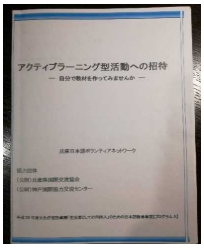
（2） 目標の達成状況・成果

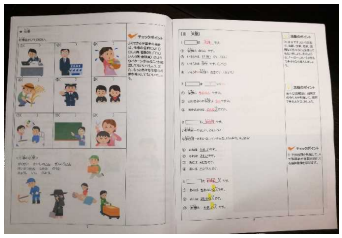
本取組では、ボランティアがアクティブラーニングを知り、それを日本語支援に取り入れるための教材を作成し、実際の支援に使えるようになることを目指した。アクティブラーニングという新しいことばに戸惑った受講者もいたようだが、講座後のアンケートでは、ほとんどの受講者が、講座を受ける前よりも日本語教育への理解が深まったと感じていることから、目標はほぼ達成できたと言える。また、今回の取組では、受講者に拠る実践持ち寄り会を実施したことで、受講者が講座で得たことを、講座を受講しなかったボランティアたちにも広める効果があった。
今回の講座を出前講座という形態にしたことで、自力で講座を開くことが難しい教室での開催が実現できたことは特記すべき点である。また、これまでは神戸市で養成講座を開催していたため、遠方のボランティアたちはなかなか参加できなかったのだが、こちらから出向くことにより、多くのボランティアに参加してもらたことは大きな成果だった。

（3） 今後の改善点について

今回の養成講座は、1か所での開催時間が8時間だった。これまでは全30時間の講座を中心に実施してきたので、8時間という短時間で受講者の学びを促進するのは非常に難しかった。これについては、もう少し時間を増やす必要があると感じた。しかし、全30時間もの講座を受講するのが難しいという意見も多いので、今後は、30時間の講座をするなら、講座を前半と後半に分けることも視野に入れて企画したい。

日本語教育のための学習教材の作成 【 教材の名称 :『アクティブラーニング型活動への招待―自分で教材を作ってみませんか―』 】			
目的･目標	本教材は、本事業で実施する養成講座ための教材である。日本語教室は学習者が気兼ねなく日本語を練習できる場である。つたない日本語を話しても「変な外国人」と思われない場所が日本語教室である。日本語教室では、学習者が存分に発話練習や会話練習ができるような活動をしなくてはいけない。しかし、実際行われている日本語学習支援では、ボランティアがさまざまなことについて「説明をする」方法が取り入れられている。そのような活動は、ボランティアたちが意図して行っているわけではなく、ボランティアたちも、「学習者に話してほしい」と思っているのだが、学習者に話してもらうにはどうすればいのかが、わからないのである。 そこで、日本語教室の活動にアクティブラーニング型活動を取り入れることにより、学習者の発話時間を増やしてはどうかと考えた。本教材はボランティアたちに次のような進化をしてほしいと考えて作成した。まず、耳慣れない「アクティブラーニング」ということばを知る。そして、それを活動に取り入れることにより、自分の説明型の活動からボランティア参加型の活動に移行できることを学ぶ。その後、アクティブラーニング型活動のための教材を作る。『アクティブラーニング型活動への招待―自分で教材を作ってみませんか―』という教材の名称にそのすべてが含まれている。		
対象	日本語学習支援をしている人。		
教材の内容	名称:『アクティブラーニング型活動への招待―自分で教材を作ってみませんか―』 本教材は、2部構成である。 1部目では、アクティブラーニングについての理解を促し、2部目は、アクティブラーニング型活動のための教材を作成する指南書としている。 〈目次〉 1部 1.「アクティブラーニング」とは 2. アクティブラーニング型活動を考えましょう！ 3. 教室でのアクティブラーニング型活動について考えましょう！ 2部 1. アクティブラーニング型活動のための教材を作りましょう！ 2. 教材作成のための参考教材 Lesson1 わたしの家族 Lesoon2 レストラン Lesson3 きのう、あした Lesson4 すきなもの、すきなこと		
実施期間	平成29年5月16日～平成29年7月18日	成果物のリンク先	兵庫日本語ボランティアネットワークHP http://site.m3rd.jp/hyogo-nihongo-volunteer-network/ HPへのアップは、6月以降の予定）
作成教材の想定授業時間 コマ数と頁数	1回2時間 ×10回 ＝20時間分	教材の頁数	50ページ
カリキュラム案活用	本教材は、最終的にボランティアたちの自作による教材を使って日本語支援をすることを目標としている。そこで、本教材の2部に掲載している教材例を作成するにあたりカリキュラム案にある内容を取り上げた。		
教材の活用方法	・養成講座では、1部と2部を別々の資料として使った。本教材をHPに掲載した際には、本事業の受講者たちにそのことを知らせ、活用を促す予定である。 ・今後兵庫日本語ボランティアネットワークで実施する各種の養成講座でも活用していく。		
今後の活用の予定	平成30年度の本事業では、日本語学習のための教材を作成する予定である。その際、さっそく本教材を活用して教材を作成したいと考えている。		





4.　事業に対する評価について

（1）　事業の目的・目標

兵庫日本語ボランティアネットワークでは、平成28年度の同委託事業において、ボランティアの新しい2つの能力を育てるプログラムを行った。プログラムの目的をボランティアの能力を育てることとしたため、養成講座を軸に事業全体を企画した。養成講座には、「問題解決能力」と「クラス形式に対応できる能力」という2つの能力を向上させるための内容を取り入れた。講座の受講者に「問題解決能力」を高めてもらうため、内省を働かせ問題を解決する技術であるクリティカルシンキングを学んでもらい、その実践として、ボランティアとして自分が抱えている悩みや問題を自分で掘り下げて考え、その過程を発表してもらった。また、「クラス形式に対応できる能力」をつけてもらうために、アクティブラーニングについて知ってもらい、実践の場として、同事業で開催した日本語教室での実習を行った。

このような養成講座をした結果、講座の受講者たちから、アクティブラーニングを学んだことにより、普段自分が行っている1対1の支援に対する考えが変わったという意見をもらった。学習者が能動的に学習に参加するよう、教授者がさまざまな活動を授業に取り入れるのがアクティブラーニングなのだが、受講者たちはアクティブラーニングとは何かを学んだことにより、これまでの自分の支援が説明中心であったことに気づいたようだった。これまで当団体が開催してきた養成講座や研修会で地域日本語教室のボランティアたちと話をする機会を持ってきたが、そこでも、説明中心になってしまう、あるいは、気がつけば自分ばかりしゃべっているので学習者のために良くないとは思うのだがどうすれば改善できるか、などの相談が寄せられてきた。その場では、そうなる理由やいくつかの改善方法を提示してきたのだが、ボランティアは今一つ納得しかねるという顔つきでうなずくことが多かった。それが、昨年度の養成講座では、ほとんどの受講者から改善策がわかったという感想が出たのである。

そこで、今回、前年度の取り組みのうち効果が高かった「アクティブラーニングをボランティアに知ってもらう」という部分を取り出し、それを広めることを目的に事業全体を企画することとした。高等教育におけるアクティブラーニング型の授業はクラスを対象とした方法だが、本事業では、地域の日本語教室で中心的な活動形態である1対1の支援での実践が可能な具体的方法を提示する。ボランティアにアクティブラーニングを知ってもらい、それを支援に取り入れてもらうことにより、当団体がこれまで取り組んできた「自律学習ができる学習者を育てる」ということにもつながっていく。

また、学習者の自律を育成するということについては、学習者自身が自分の日本語能力や日本社会でひとりでできることを自覚する必要があるため、カリキュラム案のポートフォリオを活用することによって、現在の自分を知り、今後の計画を立てる助けにしてもらおうと考えている。それと同様に、指導者やコーディネーターにもカリキュラム案の指導力評価を活用してもらい、本事業が終了した時に自分の能力がどの程度変化したかを自覚するツールとすることを考えている。

（2）　目的・目標の達成状況・事業の成果

当団体では、兵庫県全域を活動の対象としているため、会員も広範囲に存在している。しかし、養成講座や研修会などは、ほとんどの場合、当団体が活動の拠点としている神戸市で実施していた。すべての会員が公平に学びの機会を得るためにはどうすればよいかということが、当会の課題の1つであった。本事業では、その課題を解決するために、養成講座を兵庫県下の4か所で開催した。昨年度までは神戸市で30時間の養成講座を実施したのだが、今年度は4か所で開催したため、1か所での時間は8時間となった。受講者一人当たりの時間は減少したが、これまで養成講座を受講したくても開催場所が遠いため受講を断念していたボランティアたちに受講の機会を提供できた。また、開催に協力してくれた団体が、当団体による「出前講座」が可能だということを知り、個別の出前講座を申し出てくれた。これが今後も継続できれば、これまでより多くの会員に講座を提供できると考えている。

講座の内容については、昨年一定の効果が得られた内容を、今年度さらに多くのボランティアに広められた。今年度は、複数の地域で開催したため、講座の効果は受講者の数が多かったことだけにとどまらず、本事業で作成し本講座で使用した教材と共に、アクティブラーニング型活動が広範囲で広められる可能性が高まった。

今年度新たな取り組みとして、実践持ち寄り会を実施した。これは、本事業の出前講座の受講者に、講座開催後の活動での効果を発表してもらう目的で行った。これにより、出前講座で学んだ、アクティブラーニング型活動のための教材を作成し、実践してみるということが、ボランティアたちにどのように理解されたかを知ることができた。

また、本事業での日本語教室では、昨年度の事業で実施した養成講座の受講者がボランティアとして関わっていることから、講座で学んだアクティブラーニング型活動を取り入れた活動を実践した。このように、昨年度からの事業で行ってきたことを、今年度の事業で応用したり、拡張したりできたことは、今後の当団体の活動の力にもなった。

今回の取組では、講座の受講者たちにはアンケートを取り、概ね効果があったと評価された。それに加えて、講座のあと、受講者からのメールが講師に届き、講座で得たことなどについて、質問や意見交換などが行われることが複数あり、これも講座が良かったという評価を得たためだと考えている。そして、当団体の出前講座が口コミで広まるのも確認できた。

日本語教室に参加した学習者たちからも良い評価を得られた。しかし、今回は簡単なアンケートだけで終わったため、個別の学習者の必要性をどれだけカバーできたかが把握できなかった。今後は、そのようなことをどのようにして得るかを考えていかなければいけない。

（3）　標準的なカリキュラム案の地域での活用について

本事業では、標準的なカリキュラム案を養成講座で使用する教材を作成する際と、日本語教室での活動で活用した。標準的なカリキュラム案は、生活者としてお外国人の日本での行動を基準として構成されていると理解している。これまでよりさらに外国人が増えると考えられることから、今後は、地域日本語教育に直接は関わっていない住人にも、外国人について知ってもらう必要がでてくる。その場合、外国人が来日して一定期間、どこかの地域住民として生活するとき、どのようなことに不便を感じるのかということを周知する際に活用できると考える。

（4）　地域の関係者との連携による効果，成果　等

本事業のうち「日本語教育を行う人材の養成・研修の実施」を企画するにあたり、日本語ボランティアたちはどのような学びの場を希望しているかを調査した（平成28年度文化庁コーディネーター研修：尾形文）。その調査には、当団体の会員である6つの日本語教室の日本語ボランティアと、平成28年度の同事業の養成講座の受講者たちの、計84人に協力してもらった。その結果をもとに、今年度の「日本語教育を行う人材の養成・研修の実施」の取り組みを「出前講座」に決定した。出前講座では、上の調査の内、開催時間数、開催場所、内容を参考にした。

次に、今年度の事業の実施に関しては、これまでも協働体制をとってきた兵庫県国際交流協会や神戸国際協力交流センター、及び神戸市にある当団体の会員教室と意見交換をしながら、昨年の事業を踏まえて、さらに事業を発展させていくことを目指した。3回にわたる運営委員会では、各取組の内容に関する意見交換がそれぞれの立場から活発に行われ、次年度の事業を企画する際の参考となった。

また、今年度、新たな協働体制として、神戸市にある神戸松蔭女子学院大学の准教授と大学院生に協力を依頼し、「日本語教育のための学習教材の作成」に取り組んだ。「教科書は生ものである」と言われているが、今の学習者の生活に役立つ教材を作成するにあたり、大学院の若者の視点を取り入れたことより、旬な日本を提示できた。神戸松蔭女子学院大学とは、これまでも当団体の養成講座のゲストとして留学生を招いており、今年度の事業を機会に今後も更なる関係が築けると考えている。

（5）　事業実施に当たっての周知・広報と，事業成果の地域への発信等について

[出前講座と実践持ち寄り会]

本事業の出前講座は4か所で開催したのだが、1か所の少人数の開催地以外では、チラシを作成し広報した。神戸市は当団体で作成したが、残りの2か所は、協力団体が作成し広報してくれた。2団体とも、自分の教室だけではなく、近隣の教室に積極的に声を掛けてくれ、予想以上の受講者が集まった。

「日本語教室」

チラシを作成し、近隣の公共の場（図書館、役所、公民館など）に置いた。また、当団体のホームページや、協力団体のホームページへも掲載してもらった。

（6）　改善点，今後の課題について

出前講座は、開催地の団体の協力により、予想以上の結果を得られた。これをもとに、今後、違う地域での開催を広めていけそうである。しかし、遠方で開催する場合は、時間数を多くすることが困難であると予想されるので、受講者に十分な学びの機会を与えることができるかどうかが問題である。

日本語教室の開催にあたっては、学習者が定着するには、ある程度の年数を要することを実感した。最初の学習者の確保にも、スタッフ全員が苦労したが、来たり来なかったりということにも悩まされた。回を重ねるごとに、学習者の顔ぶれが定着していったが、慣れたころには教室を一旦閉鎖することになった。当団体では、教室に利用する部屋を持っていないため、年間を通して教室を開催するのは、資金面で難しい。次回の開催を待ってくれている学習者もいるので、次年度も教室を開催したいが、また新たな学習者の獲得が課題となるであろう。

（7）　その他参考資料